

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

- | | | |
|----|-------------|--------|
| 1. | 教育学部・教育学研究科 | 研究 1-1 |
| 2. | 教育実践研究科 | 研究 2-1 |

教育学部・教育学研究科

I	研究水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、過去 4 年間で著書（1 名あたり）が 1.16 件、論文が 7.1 件（査読付きは 2.5 件）、口頭発表が 3.1 件、特許申請数は、単独が 1 件、企業との合同が 1 件、個人が 2 件の合計 4 件である。なお、教員養成に関係する研究科の特徴から教科書の執筆にあたるものが 70 名にのぼっている。研究資金の獲得状況については、平成 19 年度の科学研究費補助金の採択総数 53 件（約 6,000 万円強）であり、その内訳は単独が 36 件、学内共同が 2 件である。また、当該大学教員が研究分担者となっている採択数は 47 件である。学内においては、学長裁量経費に加え、教育研究重点経費を確保し、学内の競争的な資金を活用して優れた研究計画への支援や科学研究費へのインセンティブに活用してきた。この総額は 4 年間で 1 億円を超えるなどの相応な成果である。

以上の点について、教育学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、教育学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、教育学部・教育学研究科において、教育・心理、特別支

援教育をはじめ、人文・社会、自然さらに保健・体育、芸術の各分野で相応の優れた成果を上げている。学術面では、自然科学分野の論文はいずれも国際的に評価の高いジャーナルに掲載され引用回数も多い。特に従来の個体潤滑剤を超える新個体潤滑剤の可能性を示すもので、グラファイトにフラーレン単層膜を内包した化合物が測定精度の範囲内で摩擦係数ゼロを報告した研究は、卓越した高い研究評価を、材料工学における Hume-Rothery 則の成立の理論的研究から派生する研究は、高い研究評価を受けている。そのほか人文・社会科学、教育学・教科教育関係の分野においても優れた成果を上げている。社会、経済、文化面では、創作の成果を中心に取り上げ、磁土の魅力を引き出す陶芸作品、陶磁器、油彩肖像画の分野において、文化的な有用性の高い研究成果を生み出す活動が顕著に展開されており、国内外において高い研究成果を上げている。また、授業実践の研究も優れた成果を上げている。この4年間に査読付きの国際ジャーナルに掲載された論文数は、全体で309件（このうち自然科学系が237件で全体の76.7%を占める）であることは、相応の成果である。

以上の点について、教育学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、教育学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が2件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が1件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が1件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年

度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1
期中期目標期間終了時における判定として確定する。

教育実践研究科

I	研究水準	研究 2-2
II	質の向上度	研究 2-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、教員が平成 20 年度及び平成 21 年度に発表した著書等 24 件（代表編集 3 件、共著・分担執筆等 20 件、訳書 1 件）で教員一名当たり 1.4 件、論文等 72 件（国際・国内レベル 6 件、大学の紀要 15 件、地方学会・啓蒙誌 40 件、その他 11 件）で教員一名当たり 4.2 件である。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金を平成 20 年度及び平成 21 年度で 6 件、総額 450 万円獲得しているなどの相応な成果がある。

以上の点について、教育実践研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、教育実践研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

2. 研究成果の状況

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、教職大学院としての研究として、①「理論と実践の融合」、ミドルリーダー養成の基礎となる研究、②デマンドサイドの求める今日的な教育実践課題に対応した研究、③学部卒業学生の「実践的力量」育成システムの研究、④日本教育大学協会、教職大学院協会、専門学会・分野等の関係者における研究、⑤「学部と大学院を通じた教員養成のモデル」を提案できる研究の 5 テーマについて協働的な取組が行われ、平成 20 年度及び平成 21 年度を通じて具体的な成果として現れているなどの相応な成果がある。

以上の点について、教育実践研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、教育実践研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「相応に改善、向上している」と判断された事例が3件であった。